

日野啓三 昭和二十九年の文業（上）

山内祥史

昭和二十八（一九五三）年発行の諸誌紙の裡に、「日野啓三」の署名のある文章は発見できなかった。昭和二十九（一九五四）年になると日野啓三は、奥野健男等と同人雑誌「現代評論」を発行して活発に活動すると共に、「新日本文学」誌上に連名で「読書ノート」を連載し、「初期の（政治と文学）のテーマ」を集成していった。この二誌上での日野啓三の文業については、続稿で紹介することにし、ここでは「現代評論」と「新日本文学」とに所掲の稿を除外した、昭和二十九年に公表の日野啓三の書評二篇と評論二篇とを紹介したい。

I レオニード・レオノフ著『襲来』

昭和二十九年第一の業績は、昭和二十九（一九五四）年二月一日付発行の「近代文学」第九巻第二号の「書評」欄に掲載された「レオニード・レオノフ／袋一平訳『襲来』」である。原題名は *Haucebrne*。この書評は、昭和二十七（一九五二）年二月一日付発行の「近代文学」第七巻第二号に掲載された日野啓三の書評「ジャン・ゲノー著『深夜の日記』」と同九月一日付発行の「近代文学」第七巻第九号に掲載

された日野啓三の書評「除村吉太郎編『ソヴェト文学史』I・II」での論旨を継承し発展させたものといえよう。

まず、この戯曲に対するチモフェイエフの『ロシア・ソヴェト文学』一九四九年版での、次のような言説が掲示される。

「愛国精神はロシアのすべての人々を統一し、彼らの心の中にあらゆる一切の余事と利己心とを焼きつくし、彼らを祖国の敵に対する献身的な闘士に一変させる——そこにこの戯曲の思想がある」

そのあとに、日野啓三の次のような言説が続く。

たしかにこの作品はドイツ軍襲来の前夜、出獄して故郷の町にかえつてきた痴情による殺人事件という余り感心できない前科をもつひとりの余計者の青年が、ドイツ占領軍の司令官を射殺してその場で逮捕され、お尋ねもののパルチザン指導者の身代りになつて絞首刑にされるという英雄的な物語である。その限りにおいて、右の指摘は決して誤りではない。主人公フョードルはたしか

に「献身的な闘士に一変」したことを行動によつて実証している。

書評「除村吉太郎編『ソヴェト文学史』I・II」でいう「革命を成就し、五カ年計画を戦い、独ソ戦争を勝ちぬいて今日のソヴェトを築きあげた彼等ソヴェト人たちの創造する情熱と精神の美しさ」の一端を示した作品、ということになるのだろう。だが、作者レオーノフは、「巨星の前には」「全くその色を失うに至」っている「雑階級的或はブルジョア色がかった」「星屑」といわれる存在である。日野啓三は、「自らの現在を創造するため」に「われ／＼自身の問題」として、この作品を論じようとするのだ。

作品によれば「両親や妹からさえ全く愛想をつかされていた」フォードル。「典型的なソヴェト女性である妹オリガの彼に対する軽蔑」は、とりわけ極端であった。そのフォードルと彼の「英雄的行為」との間には、「ドイツ兵に輪姦された少女アニスカの無残な姿を目のあたりにみる」という「事件」がはさまっている。彼はその「事件」を転機として「忌まわしい前科者から、輝やかしい闘士に生れ変わった」ことになり、レオーノフは「ここに一種奇蹟的ともいふべき信念甦生の物語」を書いたという「あとがき」どおりの筋書となる。だが、日野啓三は、「フォードルが捕つてから後の、相変らずのシニクな、時には粗暴でさえある余計者の言動」から、チモフェイエフの理解に「疑問」を提するのだ。もしかすると、彼はドイツ軍の司令官を殺してから後も「ほとんど変つていない」で「全く以前のままの彼」ではないか、「人間がひとつの偶然の事件で決定的に変るといふような」

ことは、あるいは物語の中にしかないのではないか」というのだ。

日野啓三は、フォードルが妹オリガに会う次の場面に注目する。

オリガ（眠っている人を起すかのように）あたしがわかつて？

あたしよ。どんなことがあつたの？ あたしたちもう一年も会わ

なかつたような気がするわ

フォードル（じつと妹をみて）長い……話だつたよ。

オリガ（兄の視線に耐えられず）さ、あつちで少し横におんななさい。

この場面の「長い……話」とは何か、またオリガは何故兄の視線に耐えられなかつたのか、と日野啓三は設問し、「フォードルの眼」は、次のように語つたというのだ。「問題は一瞬の偶然の出来事の中にあるんじゃない。長い……話なのだ」と。ここには、「英雄だけが英雄的な行為をなしうるのだという英雄の論理」に対する、あるいは「英雄に生れ変らなければ英雄的な行為をなしえないという凡人の心理」に対する、「二重の抗議」があるというのだ。「彼はドイツ軍司令官を殺すことによつて、人々の軽蔑にしか値しない余計者でさえ英雄的な行為をなしうること」「捕われた後も決して英雄を気取らないことによつて、英雄的な行為を行うためには、必ずしも英雄に生れ変わる必要はないこと」を示したのだ。「おれはおれであり、おれのやつたこととおれのやつたことだ。」「おれはおれの死を死ぬ、どこにおれ以外のものでなければならぬ理由があるか。おれがおれであるために苦

しんできた人知れぬ努力の「長い……話」に比べれば、一瞬の転機による信念の甦生といった一片の物語など何程のことであろう——これが、フォードルの「視線」の意味であり、オリガが「兄の視線に耐えられなかった」理由だと、日野啓三はこのだ。日野啓三は、この当時から、作品を「言葉」の *existentia* そのもの自身から理解しようとし、なんらかの形で *existentia* に先立って *essentia* を考え、後者によって前者を律しようとする思惟方法に反撥する、そういう姿勢を基本的に堅持していたように思われる。

処女作 *Bbara* 以来、才能という「厭うべき特権」だけを唯一の特権として、「きびしい革命と建設の中」をひたすら生きてきたレオーノフも、彼の主人公たちのように「非凡な反逆を試みることより平凡に生きることの方がいかに非凡な努力を必要としたか」と、日野啓三はいうのだ。そこには、革命と戦争という異常な現実があり、その現実には人々に長い人知れぬ魂の苦闘を要求する。「人間があり、現実があり、両者の緊張した対応関係」がある。人間の生が一度限りのもので、与えられる現実は一つしかない以上、その関係は、きびしい対決であり、いわば「真剣勝負」にもひとしい闘争である。日野啓三は、「襲来」が「献身的な闘士に一変」する物語だとは思わぬという。逆に、フォードルもレオーノフも「現実の要求を虚心に受け容れることを知っていた平凡な一人の人間にすぎない」というのだ。「英雄」「余計者」「凡人」「闘士」、これら一切の称号は、「様々な意匠」にすぎない。「意匠」の下の「裸の人間性」を忘れ「裸の現実」を見据える術を見失うと、「人間と現実と」のきびしく生き生きとした関係が

消え去ってしまうというのだ。

日野啓三が強調したいのは、「英雄崇拜と凡人蔑視」という「異常な現実」の裡では、凡人もまた非凡な行為をなしようという、「平凡な現実」である。「襲来」には、戦争と革命の時代を「よろめきつつ耐え忍びつつまっとうに生きようとした一人の人間と一人の作家の当然の記録だけ」がある、というのだ。だが、何を基準に「まっとう」というのか。「後進国」「過渡期」「知識人」の生き方の問題に真剣に取組んでいた日野啓三は、この後「大審問官論」で、その問題について徹底した思索を展開する。

II 「大審問官論」

評論の第一は、昭和二十九（一九五四）年三月一日付発行の「近代文学」第九卷第三号の巻頭に掲げられた「大審問官論」である。八ボ二段組十一頁に及ぶ力篇であった。いうまでもなく、ドストエフスキー「カラマゾフの兄弟」*Братья Карамазовы* の第五篇 *Pro et Contra* の第五「大審問官」の章を論じたものだ。導入部で第五篇の第四「叛逆」の章で、イヴン・カラマゾフが、弟のアリョーシヤに語る、神の世界の否定、神そのものの拒否、いわば「反抗の信念」を紹介する。

「罪のない（筈の）子供に加えられる不当な暴虐といわれなき苦痛の存在」という「事実」から出発して、イヴンは「二十四歳の青年だけに許されるあの力強い単純さをもって真直に」世界の凡ゆる調和の

否認、人間の条件の不正という結論」にまで行く。イブンは、冷たく冴えた思考を展開し根源的に考え抜くのだ。日野啓三が「大審問官論」を執筆発表したのも、二十四歳であった。日野啓三は、イブンが自分と同年齢に設定されていることに気付き、イブンと同様自分も「二十四歳の青年だけに許されるあの力強い単純さをもつて、真直に」思考したいと考えたのであろう。イブンはいう。「どういふ訳で子供までが苦痛をもつて調和を贖はなくてはならないのか？ そんな調和はあの臭い牢屋の中で小さな拳を固めて、われとわが胸を叩きながら『神ちやま』と祈った哀れな女の子の、一滴の涙にすら値しない」哲学者や神学者にとつては、「ある超越的な絶対」を前提として出発し、その前に地上の不調和をいかに合理的に正当化するかが問題であった。

だが、イブンやドストエフスキイにとつては、「人間に加えられた明らかなこの生きた不正が不動の事実」であつて、その前で「何を受けいれ何を拒^ひけて生きるか、——これが問題だ」と日野啓三はいうのだ。

イブンはいう。「僕は調和などほしくない。人類に対する愛のためにはほしくない。たとえ僕の考えが間違つてゐても、贖はれざる苦悶と癒されざる不満の境にとどまるのを潔しとする。(略)僕は神様を承認しないのぢやない。たゞ(調和)の入場券を謹んでお返しするだけだ。」と。これに対しアリョーシャは、眼を伏せながら小さな声で「それは謀叛です」と答えた。「謀叛？ 僕はお前からそんな言葉を聞きたくはなかつた」というイブンに、日野啓三は共鳴する。一度「人類に対する愛」を受け入れ、「人間の条件の不当さ」を認めた以上、謀叛は始められ、問題は「(調和)を讀えて人間を裏切るか、(調和)

を拒否して謀叛に参ずるか」——これがイブンのつきつける二者択一であると、日野啓三はいうのだ。イブンが選択を迫っているのは、信念の問題であり生きる覚悟の問題である以上、天と地とのいずれか一方を取るしか許されていない。天を拒んでこの人間の条件は不正であると認めた以上、新たな条件を人間の手でこの地上につくりあげるの^{でなければ、地を選んだとはい}いい難い。その事業が完成された暁には、地上から一切の不正は消えるであらう。しかしそれまでは地上に不正が残る。この間違つてつくられた世界は、その故にこそ拒否されねばならない、というのだ。

イブンは、「叛逆」の次の「大審問官」の章で、自作の劇詩「大審問官」をアリョーシャに語り、反抗の信念の歴史的帰結を示す。日野啓三は、アルベール・カミュの *La révolte métaphysique* の言葉を借り、「叛逆」の章は「形而上的反抗」を取り扱い、「大審問官」の部分は「歴史的反抗」に相当し、劇詩「大審問官」は「叛逆」の章の当然の帰結であるという意味で、「形而上的反抗」は「歴史的反抗」の序章であつた、という。「叛逆」の章でイブンが明らかにしたのは彼の「反抗に関する信念」であつたと日野啓三はいい「この世界には正しい信念がありまた正しい行為がある」「問題は正しい信念がこの歴史的現実で実行にうつされた場合、必ずしも正しい行為で結果しないことがある。一見不正な行為が正しい信念の正当な帰結でさえありうる。」という。大審問官は「形而上的反抗の信念、歴史的反抗の行為にまですすめる」「人間の不幸という形而上的事実ではなく、不幸な人間という歴史的現実が、新しい出発点となる。」というのだ。イブ

ンの思想が「現実と火花を散らして接触する最も困難な部分」から大審問官は生まれたと考へるのである。

日野啓三は、大審問官の提出する問題を四点に集約する。

第一の問題——キリストは、人間に対して余りに多くの完全なものを求めすぎたが故に、却つて人間を苦しめ不幸にし、結局はその純粋な愛とは反対の結果をもたらしたのではなかつたか。大審問官は、「パンと權威と奇蹟、キリストが拒けたこの三つのもこそ、人間の幸福を現実的に約束する前提でなければならぬ」と。日野啓三は、これを換言し、「合理的な計画経済、強大な政治権力、確固たる指導原理（世界観）」——これらが人々にはパンを、世界には統一と秩序を、（人生はどのような意味があるか）（どのようにして生きるべきか）（善とは何か）といった疑問には整然とした解答を与えて、「饑餓と騒乱と良心の悩み」は完全に地上から姿を消すであらうといい、大審問官は「精神的領域というあの不毛の荒野から、この豊かな歴史の中へ帰つてきたのだ」と、日野啓三はいう。それは「人々とともに歴史を生きていくのではなく、もはや人々のために歴史を創ることだ」というのだ。もし不調和を直視することが心の平和を乱すなら、乱された心のままに止まらねばならぬ、という。

第二の問題——彼らは戦わねばならぬ。他人の不幸によつて利益を獲得する人々、数々の壮麗な体系と巧妙な論理とヒューマニズム等美しい言葉をもつて現実の粉飾と合理化とに専念する人々等々と戦わねばならぬ。戦う以上、勝つことだけが最上の道徳で、道徳さえも利用して冷静でありうるものにだけ、戦う権利がある。

第三の問題——彼らはきびしく耐えねばならぬ。「天は神聖なほど空虚で、歴史は醜悪なほど無意味だ」という「事実」に耐ええたものだけが、欲するままに歴史を創つて行く資格がある。この世にはもと絶対的な基準というものは何ひとつないという形而上的眞実に耐えることが要求され、彼等の共同の行為だけが絶対の意味を無からこの地上に呼び戻す。

第四の問題——彼等は孤独であることを承認する義務がある。相対的でない歴史の各瞬間において、人間に明らかにされるのは絶対的な二者択一である。架空の神話的意味づけを受けとるか、歴史に意味を与えるか。後者を選んだものだけを歴史の創造者と呼ぶ。自らの信念だけが自らの行為に対して賭けるに値する全世界で唯一のものだ、という意味で、この決断は絶対的であり、孤独の裡にしかなされない。

以上の四点が大審問官の提出した問題だと、日野啓三はいう。その上で、日野啓三は、次のように思考するのである。

イブンの段階、つまり世界の不正という絶対の条件に自らの正義という信念を対立させる段階に止る限り、人は人類愛の要請と自ら潔白人間であることとを結びつけることができる。だが、世界の不正を告発するだけで、事実不正の訂正に従わないとすれば、彼は己が反抗を生きているということはできない。人間の条件が不当だと信ずるなら、その条件の改変や新しい条件の創造に手を染めることが必要である。大審問官の事業は、イブンの信念の論理的帰結であるとともに心理的必然でなければならぬ。しかも大審問官の「確信と体験と」に

よれば、その事業はキリストがついに受け入れることを拒んだ荒野の精霊の三つの警告―「地上における人間性の歴史的矛盾をことごとく包含した三つの形態」を「受け入れることによつてのみ成立しうるもの」であった。「意識して故意に明らかなき虚偽を行い不正を受け入れることだけが、恐らくこの歴史の中で歴史とともに地上の正義を要求する唯一の方法なのだ」――これが大審問官の「九十年間秘めてきた沈黙の覚悟」だと日野啓三はいうのである。「大審問官が不正であるのではない、彼は不正を選んだのだ」というのだ。イヴンの物語るところによると、彼の「人類に対する愛」「人間の不幸に対する憎悪」が度を越えていたために「彼は扉を蹴つて歴史の中に踏みこまざるをえなかつた」のである。日野啓三は、イヴンにおいて「人類に対する愛が彼を反抗の信念に導いた」とすれば、大審問官においては「反抗の信念が人類に幸福をもたらす歴史的事業に彼を導いた」のだという。第一に、「反抗の信念」は、それが「歴史の場における反抗の行為」にまで至るのでなければ不充分であり、第二に「歴史的反抗の事業」は、それがきびしい「形而上的反抗の信念」に根ざすものでなければ不充分である。

「正義」に内容を与えるために、「歴史の矛盾」を自ら引き受け、「歴史に正義を返す」ためにあえて「不正」を行うというのが大審問官の「覚悟」であり、自ら選んだ「運命」である。その意味で「彼の汚れた手」は「人間の真実と歴史との契約の徴し」であり、彼は「形而上的絶対と歴史的相対との生きた繫辞」であり、彼の事業は「地を天に近づける真実のバベルの塔」だと日野啓三はいうのだ。

語り終つた大審問官にキリストは静かに接吻したと、イヴンは最後につけ加えている。この「接吻」は、大審問官の「覚悟」とその事業に対するキリストの「理解と承諾の徴しだ」と見る事ができると日野啓三はいう。彼らの結論と行為とは正確に逆であるように見えるが、「不幸な人類に対する愛」というその「動機」とそれ故に彼らが生涯背負わねばならなかつた「精神的十字架の重さ」は等しいのだと、イヴンはいいたかつたに違いないといひ、「ドストエフスキーが、アリオシャを自作の劇詩を語り終つたイヴンに接吻させている理由も同様であろう」という。「大審問官」は、作者ドストエフスキーの「ロシアの革命運動に対する黙示録的希望の書だ」と、日野啓三は結んでいる。

却説、荒正人「同人雑誌評」(「文学界」第八卷第四号、昭和二十九年四月一日付発行)には、次のような言説がある。

近代文学には、日野啓三が「大審問官論」をかいている。少し緊張して畏縮した筆致だが、近代の擁立、変革の公式の陰面を作りあげてゐる点で、新しい世代のひとつの成熟を示す評論である。今後の一層積極的な発言を待つ。

また、山室静、荒正人、日高六郎、佐々木基一、久保田正文の五人連名の「文藝時評」(「近代文学」第九卷第四号、昭和二十九年四月一日付発行)の「『近代文学』三月号」の項には、日野啓三の「大審問官論」についての、次のような言説がある。

日野啓三のものは、ドストエフスキーを戦後といふ環境のなかでよみ、それを控え目の肉声で語つてゐる。この世代にドストエフスキーがこのやうな形でよまれてゐることは、やはり一つの成熟としてみたい。但し、結びになつてゐるキリストの接吻は、全く反対の解釈、つまり、キリストの否定といふ工合にも解釈できる。この場合は、絶望の予言者としてのドストエフスキーを心に描かねばならぬ。方程式の解を一つしかださないで、吟味を忘れたといふ感じはあるが、そのかぎりにおいて筋道は良く通つてゐる。欲をいへば、もつと裂け目が覗いてゐてもよかつた。

日野啓三は、ドストエフスキーの裡にある、新しいもの、未来的なもの、予言的なもの、此岸を越えた（向う側）から露出してきたものを、覗き見ているのであつて、「接吻」の場面で彼が指摘したかったのは、極限まで徹底された反対物はいつか必ず（極端の一致）という不思議な運命を形成するということだろう。

なお、この「大審問官論」は、日野啓三第四の著書『虚点の思想 動乱を越えるもの』（永田書房、昭和四十三年十二月二十五日付発行）の「第二部 虚点の黙示録」に収載された。その書の巻末の「解説的あとがき」には、次のような言説がある。

第二部のなかでは、とくに「大審問官論」が私には強い記憶がある。これはスターリンが死んだ翌年、いわゆるスターリン批判

の行われる二年前のものだ。私はスターリンの顔を終始思い浮かべながら、この文章を書いた。

何年もの間、若い私の心にのしかかっていた聖像の死屍を鞭うつ快感と、すでにぼつぼつ始めていたスターリン誹謗の意見に対して「悪いのは彼個人でない。われわれすべてを含めた歴史の法則そのものではないか」という反発との、矛盾するモチーフがからみ合っていた。

スターリンの事業、とりわけモスクワ粛清裁判などについての事情が明らかにされてくるにつれて、大審問官という異様な幻想的人物の姿が、改めて恐ろしい現実性をもつて理解されてきたようだ。

「カラマーゾフの兄弟」の中心には、周知のように三つの次元にわたる人間性の基本的要素の対立がある。第一はイヴンとアリョーシャとの対立、第二はイヴンの劇詩の主人公大審問官とアリョーシャの師ゾシマ長老との対立、第三は悪魔的に人間的なものと神的に人間的なものとの対立。日野啓三の「大審問官論」は、この人間性の基本的要素の前者に重点を置いて、冴えた思考を展開した、といつてよからう。この大審問官は、「人間への強すぎる愛のために、あえて孤独と不正を自らに引き受ける受難者」「自ら意識して歴史の矛盾を引き受ける受難者」というイメージが強い。キリストの理想を捨てて悪魔と手を結んだはずの大審問官が、真に人類を愛する孤独な受難者の相貌を呈している。限界を越えて予言的に根源的に思考しぬくことによつて、日野啓三は人間の既成の感覚、思考形式そのものの変革を企図したの

だろう。

III 伊藤整著『火の鳥』

書評の第二は、昭和二十九（一九五四）年四月一日付発行の「近代文学」第九巻第四号の「書評」欄に掲載された「伊藤整著『火の鳥』」である。

劈頭、日野啓三は、「もしこれが他の誰か凡庸の作家のかいたものであれば、われわれはこの作品を心から歓迎することができるといえる。この作品の出現は、次の二つの意味で「画期的な（事件）である」というのだ。第一に、この作品で作者は「自己のエゴを仮託するに足る一人の客観的人物」を造型し、自由に動かし、その「人物の心理分析、内的独白、現実感覚、現実批判を通じて、作者自身の精神の動き」を表現している。第二に、「現代的な政治的現実」に対する「感覚と反応と行動と怒りと悲しみ」とを描きあげている。

だが、作者が「かの有名な伊藤整氏」であるとすれば、見過ごせないことがある、という。まず「現実への関心」の問題。アメリカとソヴェトとを、ひとしく「技術奴隸」の組織と並置したゲオルギウと同じやり方で、伊藤整は、商業ジャーナリズムと党組織とを「鋼鉄のような残忍な、利用しうるあらゆるものを利用して、しかもゆるすことを知らない秩序のメカニズム」として、読者の前につきつけている。主人公が「次第にあくどく利用されて人間性を喪失していく過程」はよく納得できる。しかし、この女主人公の「人格破壊、自由放棄の下

手人」として、「ジャーナリズム」と一緒に「党組織」が告発されているのは「納得することができぬ」と日野啓三はいう。ジイドのソヴェト紀行 *Retour de l'U.R.S.S.* 以来、党の非人間性を云々する人々は、「具体的に非人間的な事実」をあげることがしないで、頭から「党は非人間的」と決めてかかる。伊藤整もこの例外ではない。「勿論、党の中にも多くの非人間的な人間がいる。しかしそのために誰よりも被害をうけているのは党自身である。」と、日野啓三は、懸命に「党」を擁護している。さらに「もし善意から党が人間的であることをのぞむなら、党一般ではなく、その個々人、個々の具体的事実についてこそ批判をせねばならぬ」「党を全体として向う側におしやり頭から非人間性のレッテルをはる場合、実は却つて党を硬化させていると知るべきだ。彼は自分で自分の善意を裏切っている。」とまでいう。なぜ、「党」に「善意」をもつことを要求するのか。日野啓三は、次のようにいう。「この末期資本主義のもろもろの非合理性と矛盾をいくらかでも合理化しうるものは、党をおいて他にない」からだ。さらに「党を合理的に人間的にすることこそ、自分たちの未来を人間的にすることであり、現在の非人間的な事実を変革することに通ずる。反対に党を却つて非人間に硬化させるものは、現在の矛盾に暗黙の同意を与え、自ら己が未来の可能性を殺すものだ。」と、日野啓三は、「党」への「味方」を強引に要求するのだ。

伊藤整と女主人公生島エミとは、「現在の矛盾に目をとどさず、その変革の事業を理解している」と日野啓三はいう。しかし、伊藤整がこの作品で示した「現実的関心」は、「現実の中の、ではなく現実の

外からの現実に対する関心」である。換言すれば「個人的人間観と抽象的ヒューマニズムをその基本的理念としてきた西欧的近代からの現代の政治的現実に対する批判あるいは恐怖」——それが「この作品の作者の立場だ」といい、この書は「見事に立ちおくれた日本文学^{『現実』}とともに進もうとする日本の人々の希望の書であると同時に、人々の現状維持と立ちどまりとを正当化する有毒の書ともなりうる」と、日野啓三は結んでいる。「後進国」「過渡期」「知識人」といった問題に、真剣に取り組んでいた日野啓三が、「現在の非人間的な事実」を「変革」するために、いかに「善意」をもって「党」に寄り添って接近していたかが判かる書評といつてよからう。

日野啓三のこの書評を読んで、想起される事件があった。昭和三十三年（一九五八）年十月に発生した、所謂パステルナーク事件である。私は、当時「文藝時評」を担当していた新聞に依頼されて、「パステルナークと「ジヴァゴ博士」」（「関西学院新聞」第三百八十二号、昭和三十三年十一月二十五日付発行）と題す拙稿を掲げたことがあった。その書き出しには、次のような言説がある。

ソヴェト作家ボリス・エル・パステルナーク「ジヴァゴ博士」の、ノーベル賞授与とその辞退、ないしソヴェト国内における作者に対する痛烈な弾劾悪罵、作家同盟コムソモルの除名決議、これら一連の奇矯な事態が、パステルナーク事件と呼ばれるものだ。

さらに、その拙稿の末尾の一節には、次のような言説がある。

小説「ジヴァゴ博士」は政策ではない、とパステルナークは外国記者に語る。「何故ならわたしは、政治家ではないからだ。だがすべての詩人、すべての藝術家はその時代の志向をいか様にしてでも探り出し、これを表現しなければならぬ」と。この〈時代の志向〉を表現しようとしてパステルナークは、犠牲者に対する憎悪からではなく、犠牲者の置かれた滑稽な立場に対する嘲笑、ただそのことよってのみ残酷行為を遂行する殺人鬼の、異様な相貌を浮彫りにする——「嘲笑をたたえて射殺する」と。優秀を誇るかれらパルチザンの心の、人間性欠如は階級的良心の発露と理解され、残念性はプロレタリア的エネルギーと革命本能の見本となるのだ、と主人公ジヴァゴは淡々と語る。だが社会主義が、苦悩する人間への憐憫と、社会に対するその擁護という高貴な精神的動因によってはじまりながら、かかる宿命的道をたどったのはなぜか。人間を圧迫し苛責する〈普遍概念〉に対する反抗にはじまりながら、新しい別の〈普遍概念〉——〈人類愛〉を宣言するに至ったからだ。〈人類愛〉は生ける人間に対する愛ではない。人間性という〈概念〉に対する愛、〈遙かなる何ものか〉に対する、〈正義〉と〈完全な社会秩序〉という抽象的觀念に対する愛である。この新しき〈普遍概念〉は生ける人間を自己の道具と化し、人間の価値と内的生命を拒否する。憐憫は苛酷と化し、人間的な道徳的良心は、社会、集団、運動、党派の道徳的良心によって片づけられ、それに置換される。これらが、共産主義において

異常な威力をもって現前する様相を、パステルナークは真摯に描き出しようと努めているのだ。

(略) *Partisan Review* 誌ニコラ・キヤルモンテは、パステルナークのキリスト教はドストエフスキイの伝統に帰属する、と指摘したが、これは、〈伝統〉の問題としてよりも、はるかに深刻な人間の課題と直結するだろう。ぼくは率直に信ずるのだが、「ジヴァゴ博士」が時代の証言としての、真の意味を持つのはこの点においてである、と。

日野啓三は、パステルナーク事件が発生する以前の昭和三十年に、すでに「いかに生くべきか」とか「われらは何をなすべきか」とかといった「人間」を「主体」とした問題には関心を喪い、現代的未来的な「存在の追求と表現」という問題の領域に大きく踏みこんでいた。

IV 「アルベール・カミュと正義」

評論の第二は、昭和二十九（一九五四）年五月一日付発行の「三田文学」第四十四巻第四号の「評論」欄に掲載された「アルベール・カミュと正義―『正義の人々』について―」である。

劈頭、日野啓三は〈決してこのようなことは何もの名においても許さるべきではない〉という言説を掲げている。これは、先に見た「大審問官論」でのイヴン・カラマーゾフの「形而上的反抗」の言葉を想起させる。映画「禁じられた遊び」の少女ポーレットの姿を例に挙げ、

「この世界で生起するすべての事象には当然すぎる原因と充分の必然性があるとしても、決して受け容れてはならぬ結果というものがある。」
 「人間がある事実の前で〈否！〉というとき、そのときだけわれわれはこの相対的な意味しかもたぬ世界にひとつの絶対的な意味を創り与えたことができる。」という。「不正を拒否する」という「反逆の意志」をとおして、「世界にひとつの意味を与え、人間の歴史に方向を与え、自らの生存を人間の生と化する」というのだ。もしもそうでなければ、人類の歴史も自然の歴史の一部分にすぎず、「人間は単なる存在一般、せいぜいのところ直立動物の一変種にすぎない」という。カミュが戯曲「正義の人々」*Les justes* の中で行おうとしたのは、「不正」「正義」という手垢に汚れた言葉のもつ決定的な意味をとり出すという「危険な操作」であったと、日野啓三はいうのだ。

「異邦人」*L'Étranger* のムルソーも「誤解」*La malentendu* のマルタも、その無垢はそのまま、悪に対し不正に対して受動的であった。ひとつの事件はただ事件として起こったという意味しかもたず、あらゆる事物は、単にそこに在るといふ理由だけでそこに在る。「異邦人」の文体は、諸々の価値が価値を喪失した「ニヒリストの文体」であった。「この世界には最高の意味がないということは今も私は信じつつづけている。しかし今やこの世界のうちにある何かが意志をもっていることを私は知っている。」これがナチの侵略によってカミュが発見し、レジスタンスの闘争を通じてカミュが学んだ教訓であった。かくして新しい仕事が発見された。カミュ自身の言葉によれば「人間

だけが唯一の受諾者である正義に機会を与えること」が、仕事の主題である。日野啓三は、アルベールが『カミュ論』で「レジスタンス運動と解放の頃」を境にして、その前を「シジフォスの時代」その後を「プロメテの時代」と名付けたのを分析し、「シジフォス」と「プロメテ」との微妙なちがいは決定的であるという。日野啓三によれば、「シジフォスの自尊心」と「プロメテの正義」、これが、レジスタンスの一時期を中にはさんで書かれた、二つの戯曲「誤解」と「正義の人々」との主題の相違だというのだ。

「誤解」の主人公マルタが宿泊客を殺すのは、「傷つけられた自尊心」のためであった。だが日野啓三によれば、自らの不幸、人生の冷酷、人間の条件の不正を、彼女は自らが「傷ついた自尊心の復讐の正当化に利用する」という仕方、受け容れている。手はこんでいても世界の不正を受け容れるという一事に変わりはない、というのだ。彼女はその行為によって「世界に新しい不正を加え、人間の条件の悲惨をさらに増加させることによつて、天に味方している」というのである。レジスタンスの闘争を通じてカミュが学んだ真実は、「人間は人間の条件の形而上的、歴史的不正と戦うためにこそ正義を受諾すべきであり、地上の正義を要求して不断に天と地の不正と戦うことによつて世界と人間に意味を与えるべきだ」ということであつた。これが「ペスト」*La peste* 「戒厳令」*L'État de siège* 「正義の人々」の新しい主題だといふのだ。その意味で、正義を実現するために同志と共に戦う、ダイエゴやリユーやカリアーエフたちは、反ファシズムの戦火の中から誕生した「二十世紀のプロメテ」といふことができる、日野啓三

はいう。

プロメテは、「地上の正義」を要求したために、地の果ての岩頭に縛りつけられ、鎖の重みと酷暑と寒風と禿鷹の嘴とを耐えぬく各瞬間毎に「正義」を確保した。「正義」を生きたとは己が全存在を賭けて地の果ての孤独の裡で「天」と戦いぬくことだ。「天」とはこの場合、「不正」も知らず「正義」とも無縁のままに地上を支配する絶対的な力の謂だ。「地上の不正」に無関心で「人間の正義」に非情なのが、われわれの生きるこの世界である。より公正な未来を求めて専制と戦う革命的人間は、不断に「天」と戦う時のみ誕生する。

「正義の人々」とは、「人間の尊厳」のために「天」に反抗し、「ロシアの未来」のために「ツァーリズム」に反抗する、二重の反抗者だ。彼等が愛するのは、公正な人生である。「社会的正義」だけでなく、「社会的」「形而上的」二つの条件をそなえた「人間的正義」こそ革命の最新で最後の条件である。カリアーエフが、最初セルゲイ太公の馬車に太公の幼い甥と姪とが同乗していたため爆弾を投げるべきでなかったのは、そのためである。「子供を殺すのは名誉に反することであり、「名誉は貧しい人間の最後の富」であるというカリアーエフの科白を引用し、この考えこそ「人間が人間でなくなるか否かの最後の条件である」と日野啓三はいう。カミュは「子供の苦しみがそれ自身耐え難いのではなくて、その苦痛が正当化されない事実が耐え難いのだ」という。太公は殺されるべき多くの理由を自らつくった。子供の死は何ものをもつても正当化されないが、太公の死は正当化することができる。少なくともそれは、加害者の生命をもって贖うこと

ができる。革命家はすべて自らの生命をもつて流血を贖うだけの覚悟が必要である。その覚悟が本物であれば、それだけ確実に太公とその仲間の血を流すことができる。日野啓三は、「支配階級は社会的不正を作り出すだけでなく、このような倫理的不正をもわれわれに課す」という。カリアーエフは子供を殺さず太公を殺したことによって、人道主義者でも殺人鬼でもない「革命的テロリスト」になつたのだ。「彼は革命に意味を与え、自分自身の行動に意味を与え、さらに太公の死にさえも意味を与えた」というのだ。

だが、カリアーエフが「正義」のために捨てねばならなかつたのは、「清い手の自覚」だけでなく「あるがままの愛のよろこび」もであつた。二度目に出発する直前、彼はドラからはげしい愛の言葉をきく。彼はここで、ドラへの直接的な愛情をおし殺し、あのやさしい心の平和を捨てる。ほとんど抽象的存在にもひとしい「民衆への愛」を、彼は心の平和と引き換えに受け容れる。彼の「人類に対する愛」には、「民衆の支配者」と「世界の支配者」とに対する「二重の反抗」の意志の裏打ちがあり、そのような「人間の愛」だけがよく「神の愛」に對抗することができ、神の救いを斥けて自分を救うことができるというのだ。

「正義」は人間に余りに多くの代償を要求する。それがドラの実感であり、カミュの確信であるように見えると、日野啓三はいう。「世界の悲惨」に抗議するために自ら「悲惨」を引き受け、「地上の不正」をなくすために自ら新しい「不正」を選び、その「不正」は、自らの「死」によってしか正当化できない。革命的テロリストの場合がそれ

である。「正義」とは抽象的原理ではなく、「生きた人間」に加えられる「不正」に対して「抗議する意志」のことだと、カミュは強調する。人間のために、人間が正しく人間となるためにこそ「正義」はある。「生きた人間」とその「尊厳」、その「倫理的意志」こそ尊重されねばならないと日野啓三はいう。人間の「不正」な状態は、「社会的」なものであれ「形而上的」なものであれ、告発されるべきで、人間の「反抗的意志」だけがひとつの意味をこの世界に与える、というのだ。この「評論」は、パスカルが「考える葦」の比喩で主張した「人間の尊厳」という近代の観念に強く囚われて、「如何に生くべきか」を真剣に考えた論考であつたといつてよからう。

(やまのうち しょうし)